お茶を通じて知る中国

弁護士法人大江橋法律事務所
弁護士 竹田 昌史

PROFILE

中国のレストランでは料理やお酒のメニュー以外に、お茶のメニューを目にすることがあります。また大勢で食事をする際にお酒の隣にお茶を置いて食事を楽しむ風景も珍しくありません。先日、何人かで食事をしていた際、お茶の注文をきっかけに、中国茶の話題になりました。私はこれまでお茶にあまり馴染みがなかったのですが、その時の話題をきっかけに少し調べてみるととても興味深いのです。

皆さんは、中国茶にはどのような種類があるかご存じでしょうか。中国茶の種類は、細かく分類すると数百種類あると言われていますが、大きくは6種類プラス1種類に分類されます。おおまかに茶葉の発酵の程度に応じて緑茶、白茶、黄茶、青茶、紅茶、黒茶の6種類に分かれます（これにプラスしてジャスミン茶などの花茶があります）。

緑茶は全く発酵させませんが、その他の5種類は茶葉を発酵させて造ります。ただ「発酵」といっても、白茶、青茶、紅茶は茶葉自身に発酵させますが、黄茶と黒茶は最初に熱処理して茶葉自身の発酵を止めてから、別の菌を使って発酵させます。日本人によく知られているウーロン茶は黒茶と思いきや青茶に分類され、黒茶といえばプーアル茶になります。

中国で一番ポピュラーなお茶は緑茶ですが、その代表格といえば龍井茶、中でも浙江省杭州市にある世界遺産の西湖の近くで造られる「西湖龍井」は、非常に良質で高価なお茶として知られています。杭州市は上海市から高速鉄道を使うと1時間前後で行けるので上海市に住む日本人にも馴染みがあります。私も西湖周辺に何度行ったことがありますが、見渡す限り茶畑が一面に広がり、早朝の少し霧がかかった風景は一見の価値があります。

中国ではお茶がこれだけ身近で種類も豊富だと、当然な

がら「中国茶のブランド」が生まれることになり、そのブランド価値をニセモノからどのように守るかが問題となってきます。例えば、西湖龍井の真偽を識別する方法に特許権が認められたりしています。またブランド価値といえは商標ですが、通常、地名は商標として保護されません。しかし、ある商品がある地域を産地とし、その商品の特定の品質や信用などブランド価値を構成するものが主にその地域の自然的要素等により決まるようなときは、その商品の原産地や製造方法など特別な品質を証明するための「証明商標」という特殊な商標を登録することができます。このような地名に基づく証明商標が登録されるためには、その地域の人民政府の許可証書が必要になるので、誰でも出願登録できるわけではありません。先ほどの「西湖龍井」については、2011年に杭州市西湖区龍井茶産業協会が出願して証明商標の登録を受けています。そして、毎年、全国に現れる「西湖龍井」のニセモノ製造・販売業者に対して行政機関と協力しながら摘発を行っており、時々ニュースでも取り上げられます。中国というと、外国ブランドに便乗した大量のニセモノが販売されている印象がありますが、長きにわたって受け継がれる中国茶の品質とブランドを中国人自身が守ろうと努力している姿勢には少し驚かされます。

偶然にも食事の話題に上った中国茶でしたが、私も少し中国茶について知ることができたので、今後はお酒のメニューと合わせて御茶のメニューも開いてみようかと思う次第です。

以上

具体的な事案に関するお問い合わせ☒メールアドレス：info_china@ohebashi.com

本ニュースレターの発行元は弁護士法人大江橋法律事務所です。弁護士法人大江橋法律事務所は、1981年に設立された日本の総合法律事務所です。東京、大阪、名古屋、海外は上海にオフィスを構えており、主に企業法務を中心とした法的サービスを提供しております。本ニュースレターの内容は、一般的な情報提供に止まるものであり、個別具体的なケースに関する法的アドバイスを想定したものではありません。本ニュースレターの内容につきましては、一切の責任を負わないものとさせていただきます。法律・裁判例に関する情報及びその対応等については本ニュースレターのみには依拠されるべきでなく、必要に応じて別途弁護士のアドバイスをお受け頂ければと存じます。